

病態をつかめば治療が決まる 足部・足関節周囲腱障害

熊井 司

Tsukasa KUMAI

早稲田大学
スポーツ科学学術院

ヒトはその進化の過程で直立二足歩行という特殊な運動形態を獲得しました。より高い位置からの視覚情報を得ることができ、手が解放されたことでより緻密な動きが可能となり道具や武器を使うことができ、四足歩行に比べてエネルギー効率の高い運動となったことから長距離移動が可能となりました。このようにさまざまなメリットをもたらすようになりましたが、一方で地上を移動する際の「足」には、不安定な上体を支えつつも、たった 24 cm の足に全体重を受けて運動するという非常に大きな負担がかかることになりました。つまり、歩行や走行といったヒトの生存に必須の運動において、足部・足関節は地面に対する最終作用点として、常に地面と戦っているということになります。当然ながら足部・足関節には外傷による損傷が多くなり、硬組織である骨、軟骨、関節などの破壊も多くなります。骨形態を回復し、骨配列(アライメント)を整えることが必要となってきますが、その先にある関節の動きを復元し、下肢全体に剛性を与えるためには、足部・足関節に停止する筋腱、靱帯の働きが重要となってきます。しなやかな関節の動きとともに、安定性のある足部・足関節を形成するには、コーディネートされた筋腱の働きは不可欠だと思います。

今回、「足部・足関節周囲腱障害」を特集として企画いたしました。足部・足関節周囲の腱障害を考えるうえで、まずは病態をしっかりと捉えることが重要であり、そうするとおのずと治療方針がみえてきます。さらに病態を把握する前にもう 1 つ必要な知識として、ヒトの足部・足関節が持つ固有の特性を理解しておくことが挙げられます(総論参照)。各論では、現在の足の外科を代表する専門家の先生方に、アキレス腱、足底腱膜、腓骨筋腱、長母趾屈筋腱、後脛骨筋腱に関連した障害の病態と治療法についてご執筆いただきました。この特集号が、読者の皆さんにとって日常診療の一助となれば幸いです。